連載
スラウェシ
市民通信

「スラウェシ市民通信」連載にあたって

松井和久

筆者が海外調査員として赴任しているインドネシア・スラウェシ島のマカッサル市では、二〇～三〇代の若者たちを中心に、数年前から「書く」ことを意識した運動が始まっている。他の開発途上国と同様に、インドネシアでは歴史や文化などは口承によるので、後世に正確に伝わらない。また、主体的に考える訓練が少なかったためか、批判的に物事を考える力が弱い。物事を事実に基づいて批判的に検証し、それを書き残す重要性に彼らは気づいたのである。

一方、インターネットの普及で、既存の商業マスメディアだけでなく、普通市民の誰もが情報を世界へ発信することが可能な時代になった。インドネシアなどの開発途上国でも、為政者が自分に都合のいい情報だけを流し、事実を覆い隠し続けることは難しい。インターネットという誰もが使える媒体を活用し、様々な人々が多種多様な情報を発受信するなかで、商業マスメディアが見落としたもの、伝えてこなかったものの多さに人々は気づき始めたのである。

マカッサルの若者たちは、インターネットを通じて、同じような意識を持ったインドネシア人の若者たちがジャカルタ、アムステルダム、東京などにいることを知り、韓国の『オーマイニュース』のような、普通の市民が自由に記事を投稿して作り上げていくウェブサイトの開設を構想した。そして二〇〇六年八月、インドネシア初の市民通信サイト『パニンクル』（普通の人のジャーナリズム）（http://www.panyingkul.com）が誕生したのである。

『パニンクル』には、約一〇〇人の市民記者から毎週五～一〇本程度の投稿があり、編集部で若干の修正を加えた後、写真とともに掲載される。その多くは、新聞やテレビなど商業メディアでは取り上げられず、あるいは行政や政治家の目に入らない、名もなき人々の生きざまや彼らをめぐる様々な出来事を対象に、市民記者の参与観察によって書かれた記事である。市民記者の多くはジャーナリストの卵、大学生、NGO活動家、主婦などであり、商業目的でない彼らの執筆意欲によって支えられている。

『パニンクル』の記事を読みながら、筆者自身はインドネシア研究者としていかに不勉強であったかを痛感させられた。インドネシアと二〇年も付き合ってきたのに、彼らの記事の世界はどれも新鮮な、知らない世界だった。そして、空虚な主張やジャーゴンではない、淡々と描かれた事実の描写の強さに感動した。そこには、地域研究で見えなかった地域の人々の姿があった。そこで、日本人の視点でインドネシアを伝えるのではなく、彼らの視点や考えを日本の読者へ伝えてはどうか、筆者は翻訳者としてその仲介役になろう、と考えた。こうして、編集部はじめ研究所の仲間の了解を経て、本連載は開始されたのである。

こうした現場密着型の記事を日本社会へ発信することは、インドネシアを含む開発途上国の「忘れられた人々」の世界を知らせると同時に、日本人研究者・ジャーナリストとは違う視点を学ぶ契機にもなり、地域研究者や開発途上国と関わる人々に新たな視点と有益な刺激を与えるのではないか。同時に、ささやかな社会変革へ動き出したインドネシアの若者への励みにもなるのではないか。少なくともそう期待したい。

（まつい　かずひさ／在マカッサル海外調査員）